

② 『ありがとう!』

一刻ほど歩いた所で、行く手に松の老木が見えて来た。恐らく一里塚の代わりに植えられたものだろう。

周囲に妨げになるものが何も無い所為か、枝は低く道におい被さるように繁っている。まだひと休みするには少し早いので、そのまま老木の脇を通り過ぎようとして、何かの声にふと足を止めた。

耳を澄ますと、どうやら仔犬の声のようだ。ミチはそっと松の木に近づいて幹の根本を覗いてみた。

すると、生まれてひと月余りかと思われる、薄い茶色に黒い模様の仔犬が、顔を草にうずめるようにして、力の無い声で泣いていた。

抱え上げても目を開けようとしな。恐らく一日か二日前から此処にこうしてうずくまったまま、歩く力も失くしてしまつたのだろう。

迷い犬か、それとも捨てられたのだろうか。

ミチは、はたと困つた。連れて行く訳にはいかないし、見捨てる訳にもいかない。仔犬を抱いたまま辺りを見回してみたが、まだ朝が早い路上に人影は無かつた。

お腹を空かしているに違いない。ミチは背中の中の包みを降ろすと、出がけにちえが準備してくれた握り飯を取り出した。指先で少しつまんで仔犬の口へもっていった。だけど仔犬は

何の反応も示さず、細い泣き声をあげるだけだった。

そうだ先に水をやってみよう、と仔犬を膝に乗せ、竹筒の水を掌に受けて飲ませようとするが、飲んではいくれない。指先を濡らして口元に持っていっても、口を開けようとしなかつた。

どうしたものかと思案しながら立ち上がり、もう一度周囲を見回した。

二町ほど先に、木立に囲まれた一軒の農家が目に入った。白い煙が立ち昇っているのが見える。この仔犬を引き受けてはもらえないだろうか。

そう考えたミチは、荷物を背負い直し、仔犬を胸元に抱え上げるや否や、小走りでその家に向かつた。仔犬の命の残り時間が限られているように思えたのだ。

開いたままの戸口から中を覗いてみた。白髪を後ろで無造作に束ねた老婆が、こちらに背を向けて竈に薪を足しているところだった。

「御免下さい」と声をかけるが返事をしない。傍まで近づいてもう一度声をかけた。

すると、やつと人の気配に気づいたのか、老婆が驚いた様子顔を振り向けてミチを見た。

しげしげと顔を覗き込み

「どなたじゃろ? 見かけん人じゃが。わたしや耳が聞こえんので何もわからんが、一ツ刻ほど待ってくれりや野良から

朝飯に皆が戻るがなあ」としやがれた声で言った。

一ツ刻なんて待っていられない、仔犬の命が尽きてしまう。ミチは仔犬を抱いたまま老婆に頭をさげ、一目散に外へ飛び出した。

もう考えているゆとりは無かった。来た道を一目散に引き返した。

挨拶もどかしく、引き戸を開けて飛び込んだ。ちえは、絢け台を据えて着物の仕立て直しを始めたところだった。

いきなり飛び込んできた人影が誰なのか分からないらしく、一瞬戸惑った様子だったが、次の瞬間には飛び上がらなければに驚いて、小上りまで飛び出して来た。

ミチの息づかいが余りに激しいのに気付いたちえは、水瓶から柄杓に水を汲んでそのままミチの口元へ持っていった。

「どうしたのさ？ いったい」と尋ねるちえにミチが事情を話すと

「待ってて」と言い残してちえが戸口から出て行った。

すぐに賑やかな声と共にちえは、おふでを連れて戻って来た。

「もう江戸から帰ったのかな？ そんなことはないか。どれどれこの犬かい・・・おつとこりやア大変だ。うくん、そうだ！ ちよつと待ってて」そう言っ駆け出したおふだが、暫くして酒の銚子を提げて帰って来た。

「適当な入れ物が無いからこれに入れてもらった。山羊の

乳だよ」そう言いながらミチの胸から仔犬をはぎ取ると、強引に口をこじ開けて山羊の乳を流し込み始めた。

初めのうちは苦しそうに首を振っていたが、やがて少しずつ、乳が仔犬の喉を通り始めた。

「しめしめ、どうやら上手くいきそうだ。ところでミチさん、今夜はもう一晩泊まりだね。この犬ころが安心出来るまで、放っておく訳にはいかないよね。仔犬ちゃん、ミチさん連れ戻してくれてありがとヨ！」とおふでが笑った。

仔犬を覗き込んでいたおちえも嬉しそうにチエを見て笑った。